

萩駅彩るイルミネーション

椿西、見島、小川、佐々並の児童の作品も

大正建築のレトロな駅舎が国の登録有形文化財に指定されている萩駅周辺を彩る「萩イルミネフェスタ」が今年も始まった。周辺住民が中心となって始めたライトアップも今年が21年目。昨年までの椿西、見島、小川の各小学校に加え、今年は佐々並小も参加。各地域の特色を盛り込んだ作品が華を添えている。

萩イルミネフェスタを主催する同実行委員会（溝部孝夫会長）が主催して平成17年（2005年）に始まった。きっかけは30年ほど前、地元・濁渕町内会青年部の中から萩駅周辺ににぎわいを創出したいという気運が盛り上がった。それから約5年を要したが、市内の団体や地元企業の協力を得ることで実現した。

以外にも様々な厚意を頂けて幸せだった」と振り返る。

その一例として藤本さんが挙げたのが協和建設工業㈱が提供した建築資材。イルミネーションを支える支柱として今も残っている。黒く塗られているものが当時から使用しているもので「椿西小にお願いして児童に塗ってもらった」と藤本さん。

実行委員会の初代会長で今も事務局を務める藤本健児さんは「寄付を集めて回る苦労はあったが、お金

これがきっかけとなり、椿西小も毎年フェスタに参加している。令和5年（2023年）からは見島小、昨

年からは小川小も参加。今年は新たに佐々並小も加わった。

児童らは授業や休み時間を使って1カ月かけて作品を制作した。椿西小の今年のテーマは「笑顔があふれる萩市」。平和のシンボルである白いハトや

椿の花、小学校のキャラクターをデザインした。見島小は、島に渡ってくる鳥と特産のキウウリをデザイン。島に多くいるネコにはサ

ンタクロースの服を着せた。小川小は、地域で採れるブドウやモモなどの果物や米を色鮮やかな光で表現した。

今年初参加の佐々並小は、地区のマスケットキョウラクターをデザイン。清らかな佐々並川や名物のささなみ豆腐など地域の魅力を盛り込んだ。

児童へのアドバイスを含め、イルミネーション全体を設計するのは山本真二さんの役割。町内会青年部の中で電気工事士の資格を持っていたことから当初から関わっている。山本さんの作業

は、フェスタが終わる1月上旬から始まる。取り外したLED電球などは、消耗や風雨などによる破損が激しい。これを根気強く修理するのだという。藤本さんは「山本さんが中心になって修理すること、廃棄する部材の量を半分以下に抑えられている」と感謝する。

今年はさらに電球を買い足し、昨年の倍の約5万球。「今年はメルヘンチックに仕上がった。萩駅開業100年の記念の年。多くの人に訪れてもらいたい」と藤本さん。

萩イルミネフェスタは1月5日(月)まで。点灯時間は午後5時半から10時まで。

阿武は

花火とイルミ

13日に点灯式

阿武町

道の駅阿武町周辺のイルミネーションは

13日(土)午後6時から点灯式が行われる。

当日は、冬の夜空を

彩るミュージック花火のほか、チョコマシマロホットココアの無料配布もある。ゲストは中村健太郎さん。

点灯期間は、12月13日(土)から1月4日(日)まで、時間は日没から午後10時まで。



萩駅前に設置されたイルミネーション